

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「俳句には季語が必要です」と説明した後、モンゴルから来た留学生に、「秋刀魚」のように、その名だけで季節を感じさせる言葉があるかたずねたら、自信満々に「あります！春の肉、夏の肉、秋の肉……」と返ってきて、教室が笑いに包まれたことがあります。

同じ島国でも、イギリスで食卓に「A ≡ 魚は、タラ・サケ・ニシンくらいでしょうか。それに比べて、日本の魚は豊富です。また「*注句」があるということは、世界が注目するスシの文化を思い起こしてみればわかることです。日本は **1** 国だ、といえるでしょう。

台湾へ行って、**1** カンコウ案内をしてくれた若い女性は、「日本が大好きだ」と言います。どこがそんなにいいのか尋ねると、「季節にメリハリがあつていい」と。私は「それは随分、日本のことをよく存知ですね」と答えておきました。俳句にも「夜長」という季語があります。一番夜が長いのはクリスマスの頃。「B ≡ なぜ「夜長」は秋の季語なのかといえば、それは夏に比べて長くなった **2** をいうからで、かように季語は、うつりゆく季節のメリハリ、前の季節からのドラマチックな変化を前提にしている面が濃いからです。

一口に、俳句は自然の詩だとか、環境文学だとかと言われますが、こうした日本の風土を前提にした季節感、海外で詠まれるハイクには希薄です。自然が主役である、短い詩という点は同じでも、あちらがカリフォルニア・ロールだとしたら、こちらは **1** 本物の寿司といったところでしょうか。

季語の働きには大きく分けて三つあります。「季節感」「**3** 方」「安定感」。日本の四季は多様で豊かでドラマに満ちていますから、そこで磨かれてきた季節の言葉を使うだけで*注詩情が湧くようになっていきます。

② いざ行む雪見にころぶ所まで

松尾芭蕉

雪が降つてときめくのは詩人と子供、それに南国からきた外国人くらいかもしれません。生活にとつて、雪は **2** ショウガイでしかないでしょう。花や月なら、ショウガイとはなりません。だから逆に、詩人は雪とそれによって化粧されていく景に狂喜する心を試されます。

いくたびも雪の深さを尋ねけり

正岡子規

もともと「病中雪」と前書きしての句です。詩人、それも見歩くのが何より好きな詩人である子規は、しかし雪を見ることかありません。「いくたびも」看病する家族にこれを尋ねるやりとりから、「雪」は悲しく切ないものとして心に響いてきます。

③ その悲しさ・切なさは、この句の詩の核心です。「日常」の景色を **3** イッペンさせ、美しくする「雪」。それは誰もが思い浮かべる「季節感」です。そこにとどまらず、見たくてもそれがかなわない作者の思いも、「雪」は受け止め、そのことで詩の驚きや飛躍が生まれてきます。

《C》《逆に考えれば、雪の明るさ・神聖さを誰もが思い浮かべる「安定感」が、この季語にはあるからこそ、詩への飛躍という「連想」が働くことが可能になっているとも言えるでしょう。「安定感」の世界にだけとどまっていたら、**4** 二たような俳句が並ぶことになりませんが、この「安定感」があるからこそ、誰もが **5** ヨウイに詩情を託せるのも事実です。

日本に俳人は万単位でいます。日本の主たる俳句団体の会員数を合わせると、二万人は下りません。俳句をたしなむ人を含めればもっと増えることでしょう。欧米でこれだけの詩人が日本にはいるのだと言ったら、彼らは目を丸くして、「日本は詩人の国なのか」と誤解するでしょうが、それだけ多くの人が、俳句作者でいられる大きな理由の一つに、**4** があることは間違いありません。

(井上泰至『俳句のルール』による)

*注 句：魚・くだもの・野菜などの、いちばん味のいいとき。

詩情：詩を作りたくなる気持ち。

※ 問いで、字数制限のあるものについては、すべて、や。や。「」も字数にふくみます。

問一 《A》《C》に入るもつともふさわしいものを、それぞれのア、イ、ウ、エ、オから選んで、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|-----|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|
| A…ア | さがる | イ | のぼる | ウ | かざる | エ | うつす | オ | おとす |
| B…ア | このように | イ | これもまた | ウ | それほどに | エ | それだから | オ | それなのに |
| C…ア | だから | イ | それとも | ウ | すると | エ | しかし | オ | むしろ |

問二 [1] に入るもつともふさわしいものを、次のア、イ、ウ、エ、オから選んで、記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|-------------|---|------------|---|-------------|
| ア | 自然が統一されて複雑な | イ | 食物がおいしく豊富な | ウ | 自然が大ざっぱで単純な |
| エ | 食物が海産物だけの様な | オ | 自然が細やかで多様な | | |

問三 [2] に入るもつともふさわしいものを、次のア、イ、ウ、エ、オから選んで、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ア | 季節 | イ | 前提 | ウ | 感覚 | エ | 事実 | オ | 感情 |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|

問四 — 線部①「本物の寿司」とは、何をたえていますか。十五字以内で書きなさい。

問五 [3] に入るもつともふさわしい漢字二字の熟語を、文章中からぬき出して答えなさい。

問六 — 線部②「いざ行む雪見にころぶ所まで」は、「さあ行きましょう、雪を見に。転んで動けなくなる所までも」という意味の俳句ですが、この句にこめられた作者松尾芭蕉の「詩情」は何だと筆者は言っていますか。文章中から二十五字以内でぬき出して、初めと終わりの三字を書きなさい。

問七 — 線部③「その悲しさ・切なさは、この句の詩の核心です。」とありますが、「核心」とは「ものごとの中心となるだいたいなこと」という意味です。そのことを考えに入れて、次の1・2に答えなさい。

1 「この句の詩の核心」とは、どういうことですか。その説明としてもつともふさわしいものを、次のア、イ、ウ、エ、オから選んで、記号で答えなさい。

- | | |
|---|------------------------------|
| ア | この句の中で正岡子規がもつとも表現したかった思いや感情。 |
| イ | この句の中で正岡子規の思いや感情を表す中心的なことば。 |
| ウ | この句の中で正岡子規の気持ちとは関係なく現れた感情。 |
| エ | この句の中で正岡子規がどうしても使いたかったことば。 |
| オ | この句の中で正岡子規が感じ取った中心となる思いや感情。 |

2 「その悲しさ・切なさ」とは、どのようなことに対する「悲しさ・切なさ」なのですか。

に入るもつともふさわしいものを、次のア～オから選んで、記号で答えなさい。

ア 「詩」が大好きだという日本人の国民性
ウ 「四季」という明確な季節の移り変わり
オ 「俳句」を作り、親しむたくさんの団体

イ 「安定感」を求める日本人の特性
エ 「季語」という「ルール」の存在

問九 線部1～5のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。(一点一画をていねいに書きなさい。)

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

1

二つの事件が同じ日に起こった。

モツちゃんがあかんぼうを背負って、登校してきたんだ。

「モツちゃん。おまえ、保育所とまちがえたんとちがうか。」

さつそく、チビケンがひやかした。

「うーん。べつにまちがえたわけやないけどなあ。」

モツちゃんは、あだ名のおり、もつさりといった。モツち

ゃんは佐藤実さとうみのるという、ごくあたりまえの名前だが、からだ

大きく、なにかにつけて動作がスローモーなので、モツちゃん

というあだ名がついている。

鈍牛どんぎゅうというあだ名もあったが、それは担任の山崎先生やまざきの強

い意見で使用禁止? になった。

「わあ、かわいい。わろうてはるう。」

サチベエこと秋野幸子あきのさちこが大きな声でいった。それで、みんな

《 A 》。

「モツちゃんの弟にしては男まえやないか。」

「ちよつとアツミキヨシにってるなあ。」

「あほか。アツミキヨシにてたら男まえか。」

みんなは、それぞれ勝手なことをいいあっていたが、モツち
ゃんはあかんぼうを背負って、ぼうつと a をしてつったつ
ていた。

山崎先生が教室にはいつてきた。

先生はモツちゃんのそばへきて、あかんぼうのほおを、ひよ
いとついた。あかんぼうが声をたててわらった。

「ほらみ。うまいもんやろが。」

山崎先生はそういつて自慢じまんした。

「あかちゃんというものは、本能的に善人と悪人を見わけると
んやな。つまり、ほくはゼ・ン・ニ・ン。」

山崎先生は、なにやらあやしげなことをいった。

「みんなに、ちよつとことわっておきたいんだが……。」

黒板の前で、山崎先生はいった。

「佐藤のおかあさんが、きょう入院した。持病のぜん息がひど
くなつたんだ。そのあいだ、佐藤は、ふたりの弟のめんどうを
みなくてはならん。それで、学校を休ませてほしいと、けさ電
話があつた。弟を連れてきてもいいから、休まないで学校にこ

いと、ぼくはいったんだ。みんなに相談しなくてわるかったが、しばらく、あかちゃんも六年生にしてやってくれんか。」

あかちゃんを六年生にしてやってくれといういい方がおかしかつたのか、みんな「B」。

「いよいよ。」

まっさきにチビケンがさげんだ。チビケンは、

「もうひとりの弟はどうしたんですか。」

サチベエがたずねた。

「家に監禁してある。」

「カンキン？」

チビケンが、とんきような声をあげた。

「監禁というのは冗談だが、もう五歳にもなるので、ひとりでじゅうぶん留守番ができるそうだ。」

山崎先生の説明で、みんな、納得した。モツちゃんもなかなかたいへんだなど、みんな「C」。

いつも、ぼうつとしていいるモツちゃんだが、このときはなんだかえらいやつに見えた。

そんなわけで、山崎先生の申し入れは、クラス全員の賛成で、めでたくむかえられたのだった……。

子もりというのは見かけほど楽でないことが、じき、わかつ

「佐藤。あかちゃんをおろしてやれ。」

見かねて山崎先生はいった。

「はい。」

モツちゃんは、のそのそおんぶひもをほどいた。

「先生が見ているから。」

山崎先生はあかんぼうを、よいこらしよとだきあげた。

「よしよし。先生が歌をうたってやるぞ。」

山崎先生は二十五歳で、独身だ。あたりまえのことだが、なれない手つきであかんぼうをだいているかっこうは、どうにもさまにならない。女の子たちは「D」。

「ねーんねーんころオーりよ、おこオーろオーりーよ。」

山崎先生は真剣だが、そばで見ている者は、おかしくてしかたがない。

みんなげらげらわらいだしたので、山崎先生もてれた。チビケンがまた口をだした。

「だいいち、歌が古くさいね。このごろの子は、ロックかジャズやで、先生。」

「そんな、あほな。」

山崎先生もわらいだしてしまった。

三時間目は図工の時間だった。モツちゃんは先生の許しをえ

たんだ。

あかんぼうがおとなしくしていたのは一時間目だけだった。二時間目の授業がはじまると、あかんぼうはむずかりはじめた。あかんぼうといっても、生まれて一年すこしたっている子どもだ。ながい時間、背にくくりつけられて苦しかったのだらう。

運のわるいことに、二時間目は算数のテストだった。真剣に考えているところへ、あかんぼうのむずかる声がきこえてきたので、これはこまった。

「おい。モツちゃん、なんとかしろ。」

学級委員のゴツちゃんが小さな声でささやいた。

「うーん。」

モツちゃんはちよつとうなった。それから、背をゆすつてあかんぼうをあやした。

「よしよし。ええ子やから泣いたらあかんで。よしよし、よしよし。」

まわりの者はくすくすわらった。

チビケンがわるい冗談をいった。

「口にセロハンテープをはりつけろ。」

「あほか。」

チビケンはゴツちゃんにどやされた。

てあかんぼうを教室に放した。放したなどといういい方はおかしいのだけど、あちこちよちよちと歩きまわっているようすは、なにかかわいいペットのようで、そんないい方しても、まんざらおかしくない感じなのである。

チビケンは、あかんぼうにオシメちゃんというあだ名をつけた。大きなおしめを引きずるようにして、ぼちやぼちや歩くので、チビケンのつけたあだ名はびったりだった。

オシメちゃんは、じきクラスの人気者になった。だれかれの見さかしくなく、パーをするし、わらうと大きなえくぼができて、とてもかわいいのである。

よちよち歩きと、はつて歩くのと半々くらいなので、目ははなさなければ、そんなに「キケン」でもない。絵をかきながら、みんな気楽にオシメちゃんのおもりをしている気分だった。

オシメちゃん騒動の一日がようよう終わろうとしているところへ、もう一つの事件が起こったんだ。

2

「松井、すまないけれど①北見の家へ行って、ようすを見てきてくれないか。先生は職員会議があるので、外へ出ることがで

きないんだ。」

教室のそうじをしているところへ、山崎先生がやってきて、ゴツちゃんにたのんだ。オシメちゃんを背にくくりつけて、ふきそうじをしているモツちゃんもいた。

ゴツちゃんは北見智二の家へ行った。十五分ほどして教室にもどってきたゴツちゃんは、口のはしを切つて血を流していたのだつた。

「あいつ、暴力をふるいやがった。」

ゴツちゃんはそういつて、くちびるをかんだ。チビケンが職員会議中の山崎先生をよびだした。

「すまん。」

山崎先生は、ゴツちゃんにあやまった。

「いいんです。たいしたことないから。」

ゴツちゃんはけなげにいつた。

「そやけど、あいつ、なんであんなにひねくれとるんやろ。」

「うん。」

山崎先生はうなずいて、

bをした。

北見智二のずる休みは、山崎学級のなやみの種だつた。北見智二が休むたびに山崎先生は話し合いに行っているのだが、あんまり²コウカはないようだ。

「二年前におかさんをなくしているうえに、四人兄弟だ。北見は北見なりに、いろいろ苦しいことがあるんだろう。」

山崎先生はみんなの前で、ぼつたりもらしたことがあつた。北見智二が学校を休んでいてうれしいはずがない。みんなだつて、そのことで何回も学級会をひらいている。それぞれ胸を痛めている。けれど、北見は、学校にくと乱暴はするし、無理難題をふっかけるのだ。ドッチボールをしていると、ボールはみんなおれのところへよこせという。ことわると、おまえら、おれが学校を休んでもええねんなど、人の足もとを見すかしたようなことをいう。だれだつてしんぼうに限界がある。ええかげんにさせよということ、さいごにはけんかになつてしまうのだ。

②「すまなかつたな。」

山崎先生はもういちど、だれにともなくあやまった。

33

モツちゃんは校門を出ると、家とは反対の方向に歩きました。

「どこへ行くんや。」

と、チビケンはいつたが、モツちゃんは、

見て、ちよつとびっくりしたような顔をした。

「なんや、そのかつこう。」

「おかあさんが入院したからなあ。しようがないんや。」

「そのかつこうで、学校に行つとつたんか。」

「そや。」

「あほか、おまえ。」

キタチンはあきれ顔でいつた。

「オシメちゃんてあだ名をつけてもろたんや、こいつ。」

「だれがつけたんや。」

「チビケンや。」

「あの、くそつたれめ。」

と、キタチンはいつた。

「おかん入院したら、おまえひとりか。」

「うん。弟はおるけどなあ。」

「おれと、あんまり変わらへんな。」

④キタチンは、ちよつとやさしい声でいつた。

「キタチンもおとうさんが帰ってくるまで、弟のもりをしてるんか。」

「そや。」

「いっしょやな。」

「うん。」

と、

cをした。

モツちゃんはひとりになると、ちよつと足をはやめた。

③それにしても、オシメちゃんとは、またへんなあだ名をつけられたもんやなあ。」

背中のオシメちゃんをあやしなながら、モツちゃんもつさりひとりごとをいつた。

道を通る人が **d** をして、モツちゃんを見た。このごろ、あかんぼうをおんぶしている小学生はめずらしい。モツちゃんは平気だ。

モツちゃんは春風荘というアパートの前になると、右はしの部屋にむかつて声をかけた。

「キタチンおるう。」

キタチンというのは北見智二のあだ名だ。戸がちよるとあいた。

「何しにきやがつてん。」

キタチンがどなった。

「ええやんかあ。」

モツちゃんは、

eをした。

キタチンがすがたを見せた。背におぶっているあかんぼうを

「うん。いっしょや。」

ふたりはちよつとだまつた。

「ごはん、自分でたくのんか。」

「うん。」

「おれと、あんまり変わらへんな。」

キタチンはまたいった。

「買い物にも行くのんか。」

「うん。」

「おれと、あんまり変わらへんな。」

キタチンは同じことばを、こんどは口の中で小さくつぶやいたのだった。

4

それから三十分ほどして、オシメちゃんをおぶつたモツちゃん
んとキタチンは、市場の中にいた。

「なに買う？」

キタチンがたずねた。

「ダイコンと厚あげと、サンマ。」

モツちゃんは、暗記しているようにこたえた。

ふーんと、キタチンはいった。

「キタチンはなに買うんや。」

ちよつといたずらっぽいやつを顔をしてわらつてからキタチンは
いった。

「1」

「2」

モツちゃんは目を丸くした。

「3」

「4」

「5」

ふたりは顔を見あわせて、あつはつはとわらつた。

ふたりはなかよく、ダイコンと厚あげと、サンマを買つた。

やお屋のおばさんがいった。

「ダイコンのはっぱ、つけておく？」

「もちろん。」

と、モツちゃんはいった。

「あつたりめえ。」

と、キタチンはいった。

「同じやなあ。」

モツちゃんはうれしそうにいった。

買い物をして別れるとき、キタチンはたずねた。

「おまえ、あしたもあかんぼうを連れて学校に行くんか。」

「うん。」

モツちゃんはうなずいた。キタチンはちよつと考えこんで、
それからいった。

「学校でおしっこするぞ。」

「うん。」

「おしめ、よう、かえるか。」

「うーん。」

と、モツちゃんはうなずいた。3ナれないところへもつてきて、
そんなときにかぎつて、あかんぼうは暴れるんだ。

「おれは弟や妹のおしめを千回くらいかえたんやぞオ。」

「へえ。」

モツちゃんはキタチンを尊敬した。

⑤おまえの弟のおしめをかえるために、おれ、あした学校に
行ってやらあ。」

キタチンは男らしくいった。

「すまんなあ。」

モツちゃんは、もつさり礼をいった。

市場の入口でふたりは別れた。と思つたらキタチンが引きか

えしてきた。

「おれな、」

キタチンは低い声でいった。

「かあちゃんが死んだときな、ちかつたことがあるんや。」

「……。」

「かあちゃんが死んだときな、おれ、泣かんかつたんや。そし
たらな、近所のやつらがな、親が死んだのに涙なみだもだしよら
ん、しぶといがきや、そうひそひそいよつたんや。」

「……。」

「かなしすぎたら涙なんかでるか。わからへんのやつたら、
わからんでもええわい。きょうから、こいつらに、おれのほん
とうの心を見せたるかい。おれ、そないちこうたんや。」

「……。」

⑥モツちゃんの目に、ほあんと涙がうかんだ。

「あした、ほんまにおしめかえに行つてやるからな。」

キタチンはもういちどいって、だーつと走つていった。

5

——次の日。

一時間目ののはじまるベルが鳴った。キタチンのすがたはなかった。モツちゃんはかなしそうな顔をした。

「約束したのになあ。」

モツちゃんは、オシメちゃんの顔を見ながらつぶやいた。

そのときだ。ガラツと、戸があいた。山崎先生かと思つたら、キタチンだった。

「キタチン、きたんかあ。」

モツちゃんはうれしそうにいった。

キタチンはみんなの前で片ひざを折り、手を横に出して道化師^{どうけ}のまねをした。

みんなは、《 E 》。

チビケンがピーピーと口笛をふいた。ふいてやったという感じだったが……。

つぎに、キタチンはゴツちゃんの前にきていった。

「おれの顔、一発なぐれや。」

ゴツちゃんはさすがだった。

「いいよ。その分だけ学校にこいや。」

へへ……と、キタチンはてれくさそうにわらつた。

オシメちゃんは一時間目から、教室の中へ解放してもらつてごきげんだった。

と、オシメちゃんはいった。

こんどは、ゆでタマゴを手でわって食べさせた。オシメちゃんは、それもはきだしてしまった。

「どけどけ。へたっぴん。」

キタチンのおでましとなつたんだ。

キタチンは、まず、食器に牛乳をすこし入れた。その中に、ゆでタマゴを入れて、それをスプーンの背で小さくつぶした。

「ほら。」

キタチンはきような手つきで、それをオシメちゃんの口に持つていった。こんどは食べた。オシメちゃんは手をふつてよろこんでいる。

「へえー。えらいもんやな。」

山崎先生はカンシンしていった。

キタチンはダイズのものも、小さくくだいて食べさせた。モツちゃんがまねをしてリングゴも小さくしようとすると、キタチンがとめた。

「そういうものは、そのまま手に持たせてしゃぶらせるんや。そうせんと歯がじょうぶにならへん。」

「うーん。」

と、山崎先生はうなつた。キタチンをとりかこんでいたみんな

サチベエのところへ行つて、バアーをした。サチベエはちらつと先生のほうを見て、それからオシメちゃんにバアーをかえた。オシメちゃんはこつとわらつて、こんどは横のキタチンにバアーをした。キタチンは両手で、目じりと口のはしを持つた。トウガラシを食べたサルのような顔になる。

「バアー。」

キタチンは遠慮なく大声をだした。オシメちゃんは、キヤツキヤツと、これまた、サルのような声をだしてわらつた。

授業中なので、山崎先生は知らぬふりをしていたが、目がわらつていた。それで、みんなは《 F 》。

キタチンが本領を4ハツキしたのは、給食の時間である。

その時間、オシメちゃんも一人まえに、給食を入れてもらった。

「こんなもん食べさせて、ええのんかいな。」

山崎先生はたよりなげにいった。

ダイズ、ゴボウ、ニンジンのももの、ゆでタマゴにリングゴ、それに牛乳とパンというこんだてだった。

モツちゃんがものをスプーンですくつて、オシメちゃんの口におしこんだが、じきはきだしてしまった。

「マンマ、マンマ。」

も、《 G 》。キタチンはてれくさそうに、

「なんや、なんや。」

と、いった。

——昼休み。

オシメちゃんは、とうとうやつた。

牛乳をたくさん飲ませたのがわるかった。おしめを通して、教室の床に水たまりをこしらえたんだ。

「キヤアー。」

サチベエたちが、大げさにさわいだ。

「キタチン。」

モツちゃんがSOSをだした。

「了解！」

キタチンはおしめを持つて、にげまわるオシメちゃんを追いかけるはじめた。

ひさしぶりに山崎学級の全員がわらいこぼれたのだった。

⑦山崎先生はうれしそうにキタチンとオシメちゃんをながめていた。

(灰谷健次郎「オシメちゃんは六年生」による)

※ 問いで、字数制限のあるものについては、すべて、「や。や。」も字数にふくみます。

問一 ≪ A ≫ ≫ ≫ G ≫ に入るものを、それぞれ次のア〜キから選んで、記号で答えなさい。

- ア くすくすわらった
ウ どやどやよってきた
オ あらためてキタチンを見た
キシしみみ思うのだった
- イ キタチンがれていることを知っていた
エ 山崎先生がキタチンを許しているなど、なんとなく感じた
カ 口に手をあてて、わらいをかみころすのに苦勞をしている

問二

a
e

 に入るものを、それぞれ次のア〜オから選んで、記号で答えなさい。

- ア あいまいな返事
イ 間のぬけた返事
ウ みょうな顔
エ こまったような顔
オ 暗い顔

問三

--

 に入るものともふさわしいものを、次のア〜オから選んで、記号で答えなさい。

- ア ひょうきんだががんなやつだ
ウ ゆうずうが利きかないがにくめないやつだ
オ 口が悪くていやみなやつだ
- イ おつちよこちよいだが気のいいやつだ
エ そそっかしくてはた迷惑めいわくなやつだ

問四 2 の場面(9・10ページ)で、——線部①「北見」のことを、みんなはどのような人物だと見えていますか。

問五 ——線部②『すまなかつたな。』／山崎先生はもういちど、だれにともなくあやまった。」とありますが、このときの山崎先生
の気持ちとしてもっともふさわしいものを、次のア〜オから選んで、記号で答えなさい。

- ア 北見には同級生の説得が通じないことがわかり、あきらめた気持ち。
イ 北見のわがままやずる休みを許してきた自分を許せないという気持ち。
ウ ようすを見に行ったゴツちゃんちゃんが暴力をふるわれて、腹立たしい気持ち。
エ 北見のことが心配だが、自分ではどうすることもできなくてつらい気持ち。
オ 学級のなやみの種がまた増えてしまい、学級のみんなに申しわけない気持ち。

問六 ——線部③「それにしても、オシメちゃんとは、またへんなあだ名をつけられたもんやなあ。」とありますが、学級のみんなは
どんな気持ちをこめて「オシメちゃん」と呼んでいますか。「〜の気持ち。」という形で答えなさい。

問七 ——線部④「キタチンは、ちょっとやさしい声でいった」のはなぜですか。

問八 「1」「3」「5」に入るものを、それぞれ次のア～オから選んで、記号で答えなさい。

- ア おまえの家、そんなものを食べるんか。
- イ マツタケに、牛肉に、タイのおさしみ。
- ウ 食べられたらええな。
- エ へえー。
- オ えっ？

問九 ——線部⑤「おまえの弟のおしめをかえるために、おれ、あした学校に行つてやらあ。」と言つた、キタチンの気持ちの説明としてもつともふさわしいものを、次のア～オから選んで、記号で答えなさい。

- ア キタチンはモツちゃんよりもあかんぼうの世話になれているから、学校で上手におしめをかえてみんなをおどろかせてやろうと思つている。
- イ モツちゃんの弟のおしめをかえるのはモツちゃんのためだと言いながら、キタチンは実は学校には絶対に行きたくないと思つている。
- ウ モツちゃんを助けるためにしかたなく学校に行くと言いながら、実はキタチンもみんなのいる学校に行きたいと思つている。
- エ キタチンは、学校のことが大きらいけど、モツちゃんの弟が来るなら、学校も少しは楽しいかもしれないと思つている。
- オ モツちゃんの弟のおしめをかえるために学校に行くと言いながら、実はキタチンは山崎先生にあやまりたいと思つている。

問十 ——線部⑥「モツちゃんの目に、ぼあんと涙がうかんだ。」とありますが、モツちゃんの目に涙がうかんだ理由としてもつともふさわしいものを、次のア～オから選んで、記号で答えなさい。

- ア 母親をなくしたときの涙もでないほどの悲しみを、キタチンがだれにも理解されなかったと知ったから。
- イ 自分がキタチンに会いに行ったことで、キタチンが明日から学校に行くと言つたから。
- ウ キタチンの母親がなくなつたときはなしを聞いて、入院している自分の母親のことが心配になつたから。
- エ 弟のおしめをかえるのをどうしたらいいかとなやんでいたところ、キタチンが手伝うと申し出てくれたから。
- オ 母親をなくして、毎日弟や妹のめんどうをみなければならぬキタチンをかわけいそうだと思つたから。

問十一 ——線部⑦「山崎先生はうれしそうにキタチンとオシメちゃんをながめていた。」とありますが、山崎先生がうれしそうなのはなぜですか。六十字以内で書きなさい。

問十二 「ゴツちゃん」はどのような男の子だと思いますか。文章全体を読んで答えなさい。

問十三 ——線部⑧5のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。(一点一画をていねいに書きなさい。)

平成三十年度 国語 解答用紙

(※のらんには何も書かないこと。)

受験番号		

合計	
	※

一							
問九	問八	問七	問六	問五	問四	問二	問一
1		1	初め				A
		2				問三	B
							C
			〽				
2			終わり				
3							
4							
5							
※		※		※		※	※

二														
問十三	問十二	問十一			問十	問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
1						1						a	A	
						2						b	B	
						3						c	C	
2						4						d	D	
						5						e	E	
													F	
													G	
3														
4														
5														
※				※		※		※		※		※	※	

の気持ち。